

「フィンセント・ファン・ゴッホとジョージ・エリオット」補遺

A Supplement to "Vincent van Gogh and George Eliot": Some Considerations and Material

大嶋 浩*
OSHIMA Hiroshi

My recent essay entitled "Vincent van Gogh and George Eliot" dealt with the influence of George Eliot upon Van Gogh, with special reference to Van Gogh's letters and pictures such as *The Public Soup Kitchen* and *Vincent's Bedroom*.

This article is a supplement to the essay, containing some additional considerations and backup material. In particular, Van Gogh's close relationship with English and American literature is examined; his sincere view of art and literature is considered. As regards his works of art, we deal with *The Great Lady* and the weavers series. With respect to the former picture, Van Gogh's misconception is pointed out, and in relation to the latter, a brief comparative study of Van Gogh's and George Eliot's weaver imagery is conducted. In addition, the following useful data are tabulated: Van Gogh's letters concerning George Eliot (Table 1), Dutch and French translations of George Eliot (Table 2), his favourite English and American literature (Tables 3, 4), and his works of art related to George Eliot (Tables 5-7).

キーワード：フィンセント・ファン・ゴッホ，ジョージ・エリオット，英米文学，『グレイト・レディ』，織工のイメージ
Key words：Vincent van Gogh, George Eliot, English and American literature, *The Great Lady*, weaver imagery

1 はじめに

拙論「フィンセント・ファン・ゴッホとジョージ・エリオット」（以下、「ゴッホとエリオット」）において、筆者は、オランダの画家フィンセント・ファン・ゴッホ（1853-91）が英国の女流作家ジョージ・エリオット（1819-1880）の作品から受けた影響を、ゴッホの書簡を中心に検討した。本稿は、その論考を補う考察や資料等をおさめたものである。

本稿において補足される考察は、主にゴッホと英米文学の関係、および、ゴッホの絵画のうち『グレイト・レディ』と「織工」のシリーズに関するものである。また、本稿に掲載されている資料類は、エリオットへの言及がなされているゴッホの書簡、ゴッホが親しんだ英米文学、エリオット作品のオランダ語訳と仏訳、エリオットと関連づけられるゴッホの作品、の各一覧表である。なお、エリオットへの言及がなされているゴッホの書簡の一覧表は、「ゴッホとエリオット」にも掲載しているが、本稿におけるものはより詳細なものとなっている。

2 ゴッホとエリオット

文学や読書に寄せるゴッホの関心の深さは、同時代の画家たちとゴッホを分けるものである。1888年の書簡のなかでゴッホが「多くの人たち、特にぼくの仲間の多く

の者は、言葉は取るに足らぬ無価値なものと思っている」（LB4）¹と指摘しているように、当時の多くの画家たちは文学に対して「懐疑的ないしは軽蔑的さえあった」（Seznec 283）。ところが、ゴッホにあっては、「文学と絵画は相互に関連し、同等の尊厳をもつもの」（Seznec 283）なのであった。ゴッホがとりわけ愛読したのは聖書と同時代のフランスの小説であると指摘されているが、²英米文学もかなり愛読していたことが知られている（Seznec 284; Pickvance 7）。なかでもジョージ・エリオットは、ゴッホが殊のほか愛好した作家の一人であった。

「ゴッホとエリオット」において指摘したように、ゴッホの書簡でエリオットへの言及が見出されるのは、調べたところ、もし見落としがなければ、21通に及ぶ。そのうち19通が1884年までに書かれたものであり、残り2通は晩年の1888年と1889年である。その内訳を示せば、画商時代のもものが4通、福音伝道時代のもものが7通、オランダ時代のもものが8通、アルル時代とサン・レミ時代が各1通となる（表1参照。なお、ゴッホの人生区分に関しては「ゴッホとエリオット」所収の表2を参照）。

これらの書簡から窺えるゴッホによるエリオット作品の読書遍歴は、おおよそ以下のように整理できるようである：

*兵庫教育大学第2部（言語系教育講座）

表1 ゴッホの書簡とエリオット

	年月日	場所	宛名	内容	言及されている作品	書簡番号	備考
1	1875.03.06	ロンドン	弟テオ	でかした、テオ。『アダム・ビード』のなかのあの娘についてのきみの評価は非常にいい。/ 朽葉色の砂っぽい小路が丘を越えて村落の方へ走っている。村には粘土か水漆喰を塗った農家、苔に蔽われた屋根屋根、ところどころにはりんぼくの茂みがあって周りは褐色のヒースの荒野、そして陰うつな空、地平線のところだけ狭く一条の白い線が走っているといった風景、——これはミシュルの風景画に似ている。しかし、ここにはミシュルにおけるより純粋で高貴ですらある感情がひそんでいるのだ。	<i>Adam Bede</i>	23	バーリントンハウスで開催された1875年の冬の展覧会で、ゴッホが鑑賞した、「樹木の茂った坂」(Pickvance 14)の夕景を描いた、「素晴らしい『老クローム』の風景画」(L22; Charles W. Dechampsの指摘するところでは、この風景画はクロームではなくミシュルの作 [Pickvance 14]) は、明らかに、L23でゴッホが述べている『アダム』の一篇のイラストの役目を果たすことができたであろうとPickvanceは指摘している(Pickvance 14)。
2	1875.09.04	パリ	弟テオ	ミシュル[ミシュルの絵の銅版複製]は、ぼくら二人を大いに感激させた『アダム・ビード』のなかで描写されている風景ほど美しいとは言えない。	<i>Adam Bede</i>	36	
3	1876.01.	パリ	弟テオ	最初の包みはきみ宛てのものだ。中味は『フィリクス・ホルト』だ。きみが読み終わったら、エッテンへ送ってくれ。うちのものが読み終わったら、こちらへ送り届けてくれるように伝えてほしい。ぼくの本ではないのだから。これはぼくが非常に心を打たれた本だ。きみもきつとそうだろうと思う。/ お父さん宛の小包も入っている。それをお父さんの誕生日までにエッテンへ送ってほしいか。多分、『フィリクス・ホルト』といっしょに送ってもらえると思うが、きみはエッテンの方が済んでから読めるわけだから。そうした方が一番いいかもしれない。	<i>Felix Holt</i>	51	
4	1876.02.19	パリ	弟テオ	ぼくはちょうどエリオットの実に立派な本、『牧師生活の諸情景』を読んだばかりだ。三つの物語からなっているが、特に最後の話「ジャネットの悔悟」には心を打たれた。これは主に貧民街の住民のなかで暮らした牧師の話だ。彼の畜舎はキャベツの茎などがちらばっている庭や、貧乏人長屋の赤い屋根や、煙を吐く煙突などを見下す場所にあった。かれの食事はふつうなま焼けた羊肉や、水っぽい馬鈴薯のほかになにもなかった。かれは三十四の年で死んだ。長い病気の間、かれはある女の看護を受けた。彼女は、かつて大酒飲みだったが、かれの教えを受け、その結果かれにすっかり切り切つて自分の欠点を克服し、心のやすらぎを見出した女であった。かれの埋葬のとき、ひとびとは「われは復活なり、生命なり。われを信ずるものは、たとえ死ぬとも、生きん」と述べられてある章を読んだ。	<i>Scenes of Clerical Life, "Janet's Repentance"</i>	55	"Janet"からの引用文は、正確には「われは復活なり、生命なり」("I am the Resurrection and the Life." [ch. 28; Penguin版 p. 411])までとならなければならない；英語版では"Scenes from Clerical Life"の表記、オランダ版では"Scenes of Clerical Life"の表記。
5	1876.05.12	ラムズグレイト (イギリス)	弟テオ	ぼくもまたあの「われに告げよ、古い、古い物語」が好きだ。ぼくはそれをはじめてパリで、ある夜ぼくがたびたび行った教会で聞いた。十二番も非常に美しい。……/ 大きな都市の民衆のなかには宗教に対するあれだけ強い願望があるのだ。工場や店で働くたくさんの労働者は敬虔な幼年時代を送ったのだ。だが、都会生活はときどき「あけ方の朝露」を奪い去ってしまう。それでもまだ、「古い、古い物語」に対するあこがれが残っている。心の奥にあるものは何でもそこに残っているものだ。エリオットは自分の小説の一つのなかで、小さな共同社会を作り、ランタン・ヤードの礼拝堂で礼拝を続けた工場労働者たちの生活を描き出している。彼女はそれを「地上における神の王国」と名づけているが、まさにその通りだ。これらの福音の使徒たちの言葉を聴きに数千のひとびとが集ってくる場所はなにかしら感動的だ。	<i>(Silas Marner)</i>	66	<i>Silas</i> からの引用は正確には"God's kingdom upon earth"(ch. 2, Penguin版 p. 63)、英語版では"the kingdom of God on earth"と表記されている；ランタン・ヤード(Lantern Yard)は「北の方」(ch. 1)にある「大きな町」(ch.10)の横町にある。サイラスは確かに町に住んでいたのではあるが、彼が、ゴッホのいうように「工場労働者たち」(factory workers [英語版])の一人であったかどうかは、作品の中で明確に述べられているわけではない。30年後、サイラスが故郷の町を再訪したときには、その町は「大きな工場」(ch. 21)が建ち、ランタン・ヤードは消滅していた、と作品では述べられている；英語版では"Lantern Yard"、オランダ版では"Lantern yard"の表記。
6	1876.08.18	アイルワース (イギリス)	弟テオ	もし、きみがエリオットの『牧師生活の諸情景』と『フィリクス・ホルト』をひとにすすめて読ませたら、立派な行為をしたことになる。とくに前者はすばらしい。	<i>Scenes of Clerical Life, Felix Holt</i>	73	英語版では"Scenes from Clerical Life"、オランダ版では"Scenes from clerical life"の表記。
7	1876.09.01	アイルワース (イギリス)	弟テオ	誰が老年を楽しむのか。だれがそれを回顧することができるのか、フィリクス・ホルトが失敗という言葉を思い返したように。	<i>(Felix Holt)</i>	82a	「失敗」("failure")とは、 <i>Felix Holt</i> , ch. 45 (Penguin Classics, pp. 434-35)の箇所を指しているであろう。
8	1876.10.31	アイルワース (イギリス)	弟テオ	きのうの夕方、ジョーンズさんの代わりに礼拝を行うためにターナム・モモンに行った。ジョーンズさんの体調がすげなかったからなんだ。一番年長の少年と一緒にあちままで歩いていった。かれは17歳なんだけど、ぼくと同じくらい背が高く、あごひげをはやしている。……正直で善良で、繊細な心をして、強く宗教を渴望している。将来は、労働者たちのために尽くしたいと希望し願っている。ぼくはかれにエリオットの『フィリクス・ホルト』をすすめたよ。	<i>Felix Holt</i>	79	『ファン・ゴッホ書簡全集』(79)およびオランダ版(79)にはこの部分は収録されていないが、英語版(79)に収録されている。
9	1877.01.21	ドールトレフト	弟テオ	ぼくは二月十一日にエッテンへ行きたいと思っている。お父さんの誕生日のお祝いをする日だからね。きみも行かないか。お父さんにはジョージ・エリオットの『牧師生活の諸情景』を贈ろうと思う。もし、二人で探して手に入れば、『アダム・ビード』も添えたらどうだろうか。	<i>Scenes of Clerical Life, Adam Bede</i>	84	英語版では"the Eliots' news" (the translation of <i>Scenes from a Clerical Life</i>)、オランダ版では"Elilot, 'novellen' [vertaling van <i>Scenes from Clerical Life</i>]"の表記。
10	1877.02.07-08	ドールトレフト	弟テオ	『アダム・ビード』の定価は2.60グルデンした。だから、1.40グルデンはきみに送り返すことにする。これでもう、家のひとたちがあの本を楽しんでくれることを願うばかりだ。きつと喜んでくれるだろう。	<i>Adam Bede</i>	85	英語版の一覧表では1877.02.07-08、英語版では1877.01.21の日付。84番の書簡の日付が1877.01.21なので、英語版の日付は誤記であろう。
11	1878.03.03	アムステルダム	弟テオ	最近なにかいい本を読んだかね。ジョージ・エリオットの作品はきつと読むようにしたまえ。けつて後悔することはないよ。『アダム・ビード』、『サイラス・マーナー』、『フィリクス・ホルト』、『ロモラ』(サヴォナローラの生涯)、『牧師生活の諸情景』など。また本を読む暇がきたら、ぼくもきつと読み直そうと思っている。	<i>Adam Bede, Silas Marner, Felix Holt, Romola, Scenes of Clerical Life</i>	120	英語版では"Scenes from Clerical Life"、オランダ版では" <i>Silas Marner</i> ", " <i>Scenes from clerical life</i> "の表記。
12	1881.11.19	エッテン	弟テオ	現代文明の先端に立っていると考えられる男女たち——たとえば、ミシュレ、ピーチャー・ストウ、カーライル、ジョージ・エリオットその他多くの人はわれわれにこう叫んでいる、「おお、人間よ、きみが誰であろうと、胸に心臓があるなら、何か真実で、永続性のある、ほんとうのものを築き上げようとするわれわれを助けてくれ。一つの職に従事せよ、ただ一人の女を愛せ。きみの仕事を現代的なものにせよ、きみの妻のなかに自由な現代的な魂を創造し、彼女をしぼる恐ろしい偏見から彼女を解放せよ。神がきみに望むことをなそうとするなら、神の助けに疑念を抱いてはならぬ。そして神は現今、道徳の変革、永遠の愛の光と火の若返りによって世界が一掃することを望んでいるのだ。きみはこうした努力をすることによって目標に到達し、同時に周囲の人びとに善い影響をもたらすことができるだろう。この影響はきみの事情次第で大きくもなれば小さくもなるのだ」と。		160	
13	1881.12.21頃	エッテン	弟テオ	お父さんはぼくの生活や感情を理解することができない。ぼくはお父さんの方式にはなじめない。そいつが重くのしかかって、息がつまりそうさ。ぼくだってミシュレとかバルザックとかエリオットばかりでなく聖書もときどき読んでいる。だが、ぼくとお父さんとは聖書の解釈が違う。お父さんみたいにアカデミックな仕方の解釈はぼくにはとうていできない。		164	英語版では内容が若干異なる。

(続く)

表1 ゴッホの書簡とエリオット（続き）

	年月日	場所	宛名	内容	言及されている作品	書簡番号	備考
14	1882.05.28	スヘンクウェッハ	アントン・ファン・ラッパルト	この画家たちがイギリス人についてほとんどにも知らないのは残念なことだ。……ディケンズやエリオットやカーラー・ベルのようなイギリスの作家、またフランス人ではたとえばバルザックが、言ってみれば実に驚くほど「造形的」であり、彼らの作品はハーモニーやファイルズやイスラエルのドローイングと同じく強い力強いものであることを忘れてはならない。		R8	
15	1882.09.18-19	ハーグ	アントン・ファン・ラッパルト	だけど、ねえラッパルト、バルザックやディケンズの時代は、ガヴァルニヤミレーの時代は——まったくなんとも遠いものになっていることだろう。彼らが死んでしまってからそんなに長いときが経ったわけではないが、（彼らが仕事を始めてからは）、実に長いときが経ったんだ。それ以来、多くの変化が生じたが、ぼくの考えでは、確かに、いい方への変化ではないようだ。以前ぼくはエリオットのこんな文章を読んだことがある、「それが死んでいるとしても、私はそれをみな生きているものとみなすのだ。」今書いているような時代について、ぼくの心にも同じことが言えるだろう。	(Felix Holt)	R13	エリオットからの引用はおそらくFelixのch. 6（冒頭のエピグラフ及び末尾に引用されている、マロウの『タンブレイン大王』の一節）であろう；オランダ版では"Eliot"の表記。
16	1883.02.15頃	ハーグ	弟テオ	エリオットの『ミドルマーチ』を読んでいる。エリオットはバルザックやゾラのように分析する——ただイギリスの状況を、イギリスの情で分析するわけだ。	Middlemarch	267	
17	1883.03.04頃	ハーグ	弟テオ	この一群の人物『スープ配給所』に描かれている人物たちを見てもらえたら、ぼくが彼らと一緒に過ごすのがいい気持ちになることが判ってもらえるだろうか。/ しばらく前のこと、エリオットの『急進主義者フィークス・ホルト』の中の、次のような言葉を読んだことがある——「私のまわりで生活している人々には、金持ちはばいと同じように悪行も憚徳もある。ただ彼らの、悪行なり憚徳なりについての（具体的なあらわれ方はさまざま）——そして彼らには金持ちはそなえている洗練さと呼ばれるものはない。この洗練があると彼らの欠陥をまだしももう少し我慢のできるものにしてくれるのだが。/ そのことがわたしにとってたいして問題なのではない——わたしはそうした種類の洗練というものを好まないが、好む人もある。そういう人は、そういう洗練さをそなえない連中といっしょだと気持ちがゆったりしにくいことに気づくだろう。」/ ぼくだったら、こうした表現では考えはしなかったろうけど、同じようなことは時おり感じた。/ 絵描きとしてのぼくは彼らには完全に気をゆるし満足もするだけでなく、時としてジブシーたちを思わせるような、少なくとも、何かしら画題に富んだものを彼らのうちに見いだすのだ。	Felix Holt	272	Felixからの引用文は英語。引用箇所はch. 51 (Penguin Classics版 p. 473)。ただし正確な引用ではない。
18	1883.04.21, 22頃	ハーグ	弟テオ	ファン・デル・ウェーレがまた会いに来たよ。たぶん彼がぼくを、ビート・ファン・デル・フェルデンに引きあわせてくれるだろう。この男の描いた百姓や漁師の絵の中には、きみの知っているのがあるだろうと思う。/ ぼくはこのファン・デル・フェルデンに行き会ったことがある。彼は非常によく印象を与えた——ちょうどエリオットの書いている、急進主義者フィークス・ホルトの人物を思い出させた。何かしら心の広い、荒削りなところがあって、それがひどくぼくの心を打つ——ちょうどトーション紙の持つ、あの荒削りの感じに似たものだ。一見、形をとった教養を追いかけて歩かない人間、しかし内面では、たいして人間よりもずっと先へ進んでいる人間なのだ。	(Felix Holt)	280	
19	1884.03の後半	ヌエネン	アントン・ファン・ラッパルト	美術の分野においても、文学の分野においても、ぼくは、なによりもまず魂によって仕事をしているような芸術家たちに、もっとも強い共感を覚えるんだ。たとえば、イスラエルスは、テクニシャンとしても、実に達者だ、だがそれだけなら、ヴァロンだってそうだが、ぼくは、ヴァロンよりもイスラエルスの方が好きなんだよ。イスラエルスの作品には、テクニク以上のなにかがあるからさ。素材の見事な再現とはまったく異なるなにかが、単なる明暗とは異なる何かが、色彩とはまったく異なるなにかが、あるからだ。だが、この「まったく異なるなにか」は、光の効果や素材や色彩を正確に表現することによって獲得されるんだよ。この独特な「異なるなにか」を、ぼくはヴァロンよりもイスラエルスの作品のなかにはるかに多く認めるのだが、エリオットもこれをきわめて多く持っている。ディケンズもそうさ。/ これは、主題の運びかたによるのだろうか？ そうじゃない！ 主題というものもまた、結果のひとつにすぎないんだ。/ ぼくが、なによりもまず言いたいのは、こういうことなんだよ——つまり、エリオットは、その手法においても巧妙だが、それとはまったく別に、彼女は彼女特有の天才的な特質があるんだ、そしてぼくは、この特質についてこんなふうには言いたいんだよ、たぶん、これらの本を読むと読むよりいい人間になる、とね。これらの本には、人を目覚めさせる力があると書いてもいいし、……/ このあいだ、エリオットの『急進主義者フィークス・ホルト』を再読した。とてもいいオランダ訳がある。きみも読めばいいと思う。読んでいないなら、どこかで手に入れるようにするといひ。人生についてのいろいろな考えが述べられているんだが、実に立派だと思ふし、——その他深い意味を持ったさまざまな事柄が、なんの手管もないエモラスな調子で語られている。実に生き生きと書かれてるし、いろいろな情景が、フランク・ホルや彼に似た誰かが絵に描くような描きかたで書かれている。眼のつけどころもの見方も、そっくりだ。エリオットほど、一貫して誠実で善意に満ちた作家はざらにはない。この『急進主義者』という本は彼女のたとえば『アダム・ビード』などと同様、オランダではよく知られていない。また『牧師生活の諸情景』などもよく知られていないね——これは、イスラエルスの作品を知らぬ人がいるのが残念なように、残念なことだよ。	Felix Holt, Adam Bede, Scenes of Clerical Life	R43	英語版では"Scenes from Clerical Life"、オランダ版では"Eliot"の表記。
20	1888.09.24	アルル	弟テオ	ぼくは『両世界評論』でトルストイについての或る評論を読んでいる——トルストイは、彼の民衆の宗教にたいへん興味を持っているらしい。イングランドのジョージ・エリオットと同じだ。		542	
21	1889.10.20-22頃	サン・レミ	末妹ウィレミー・J. V. ゴッホ	木のベッドが一台と椅子が二脚ある、がらんとした寝室の「室内」は恐らく一番醜いと思われるだろうが——それでも二度ばかりこれを大尺で描いた。/ ぼくは『フィークス・ホルト』に書かれているような簡素な味を出そうと思った。こういふきみはすぐにこの絵を理解するだろうが、そういうことが頭に入っていない人の眼にはやはり滑稽なものに映るだろう。	Felix Holt	W15	Pickvanceは、ゴッホがその「寝室」を「がらんとした寝室 (the empty bedroom)」と呼んでいることに注目し、『フィークス』と並んで、ファイルズの『空の椅子』(Empty Chair, 1870)が、この『フィンセントの寝室』に影響を与えた可能性を示唆している (7)。

(斜線 /)は書簡中の段落の変わり目を、()付きの言及作品名は書簡中では言明されていないが書簡の内容からそれと判断できるものを示している；『ゴッホ書簡全集』等より作成

(i) ゴッホはロンドン支店時代に初めてエリオットの作品に出会い、1875年3月にはすでに『アダム・ビード』を読んでいる。そして、テオによるヘティの評価に同意し、その作品のなかの風景描写の美しさに感激している (L23, L36)。

(ii) その後、パリ支店時代の1876年1月までに『フィークス・ホルト』(以下、『フィークス』)を読んで「非常に心を打たれ」、家族にも読むことを勧めている (L51)。同年2月には『牧師生活の諸情景』を読み終え、とりわけ「ジャネットの悔悟」に感銘を受けている

(L55)。続いて、同年5月中頃までに『サイラス・マーナー』を読み、特にランタンヤードの礼拝堂で礼拝を続けた労働者の生活に注目している (L66)。このパリ支店時代、ゴッホは若きイギリス人ハリー・グラッドウェルと一緒に、聖書や詩などを読んでいたことが知られている (L42, L55, L44)。この時期のゴッホによるエリオット作品の読書は、この「尊敬すべきイギリス人」(L44, L45)の影響によるものかもしれない (Pickvance 21, 44)。ちなみに、ゴッホ自身がオランダの家族に送って読むことを勧めた『フィークス』の本は、ゴッホの書簡によ

れば、「ぼくの本ではない」(L51)と述べられているが、グラッドウェルの本であった可能性が高いのではないだろうか。

(iii)その後、アムステルダム時代の1878年3月初旬までに『ロモラ』を読み、ハーグ時代の1883年2月に『ミドルマーチ』を読んでいる。ゴッホがちょうどこの頃入手した『グラフィック』の1871年から1882年号に掲載されていた『ミドルマーチ』の書評を目にしたことが、ゴッホがこの小説を読むきっかけになったのだろうと考えられている(Pickvance 21)。³ この他に、エッテン時代の1881年にもエリオットの作品を読んでいたこと(作品名は不明; L164)、および、ヌエネン時代の1884年に『フィーリクス・ホルト』を再読したことが知られている(LR43)。

以上のように、書簡中で明白に言及されているエリオットの作品は、『牧師生活の諸情景』、『アダム・ビード』、『サイラス・マーナー』、『ロモラ』、『フィーリクス・ホルト』、『ミドルマーチ』の6作品であり、『フロス河の

水車場』や『ダニエル・デロンダ』等の作品への言及は見当たらない。どうやらゴッホはエリオットの全作品を読んではいなかったらしい。Pickvanceも同様の推察をしている(21)。

ただし、1878年の書簡(L120)では『アダム・ビード』、『サイラス・マーナー』、『フィーリクス・ホルト』、『ロモラ』(サヴォナローラの生涯)、「牧師館物語」など(傍点筆者)のエリオットの作品を読むように弟テオに勧めており、ゴッホが上述の6作品以外のエリオットの作品を読んでいた可能性がないわけではない。

さらに言えば、ゴッホは英米文学を原文の英語だけでなく、仏訳(例えば、ディケンズの仏訳全集[LR30])やオランダ語訳(L253, LR43)でも読んでいた。1884年の書簡(LR43)では『フィーリクス』のオランダ語訳を「とてもいい」ものとして褒めるとともに、総じてエリオットの作品が「オランダではよく知られていない」ことを惜しんでいる。⁴ 実際には、この手紙が書かれた1884年にはすでにオランダでは、詩を除いて、エリオットの長編、中編、短編作品がすべて翻訳され、書評にも

表2 エリオット作品の翻訳(1891年までのオランダ語訳、仏訳)

	作品名	原書の出版年	オランダ語訳	仏訳
1	<i>Scenes of Clerical Life</i> [中編]	1857.01. (Part 1 of "Amos Barton" in <i>Blackwood's</i>) 1858.01.05 (2 vols.)	1861 (2 vols.) 1870 (<i>Romantische Werken</i> , vol. 1 [<i>Scenes+Silas</i>])	1863 (First translation: "Gilfil") 1863 (First full translation) 1884 (Second translation, 1 vol.; 1887, second edition, "Amos," "Gilfil"; 1886, second edition, first printing, "Janet's"; 1890, second edition, second printing, "Janet's") 1890 (Third translation: "Amos") 1891 (Fourth translation: "Janet's" [abridged])
2	<i>Adam Bede</i> [長編]	1859.02.07 (3 vols.)	1860 (First translation, 3 vols.; 1863, second edition, 1 vol.; 1891, sixth edition [a copy of an edition also called the sixth edition, dated 1885, is in the St. Paul Public Library]) 1873 (<i>Romantische Werken</i> , vol. 2)	1861 [1860.11.26] (First translation, 2 vols. bound in 1; 1886, second edition, 2 vols. [or, 2 vols. in 1])
3	"The Lifted Veil" [短編]	1859.07.01(in <i>Blackwood's</i>)	1878 (with "Brother Jacob")	1880 (<i>La Revue des Deux Mondes</i> , Third period, XLI [15 September 1880])
4	<i>The Mill in the Floss</i> [長編]	1860.04.04 (3 vols.)	1861 (First translation, 3 vols.) 1870 (<i>Romantische Werken</i> , vol. 3)	(1860.06.15 [a 40-page résumé of the initial British edition of the novel, the 15 June 1860 number of the <i>Revue des Deux Mondes</i> , XXVII]) 1863 (First translation, 2 vols.; 1887, second edition, 2 vols.) [1891 (First French edition in English, with notes, abridged)]
5	<i>Silas Marner</i> [長編]	1861.04.02	1861.06 (1 vol.) 1861.07. 1870 (<i>Romantische Werken</i> , vol. 1 [<i>Scenes+Silas</i>])	1862 (First translation, 1 vol.; 1881, second edition, 1 vol.) 1885 (Second translation, 1 vol.) 1889 (Third translation, 1 vol.; 1890, second printing) [1887 (First French edition in English, with notes in French, 1 vol.; 1889, second printing; 1890, third printing; 1891, fourth printing) [1890 (Second French edition in English, with notes in French, 1 vol.; 1890, second printing; 1891, third printing)]
6	<i>Romola</i> [長編]	1862.07.-1863.08. (in <i>Cornhill</i>) 1863.07.06 (3 vols.)	1864 (3 vols.) 1871 (<i>Romantische Werken</i> , vol. 4)	1878 (First translation; 1887, second edition)
7	"Brother Jacob" [短編]	1864.07. (in <i>Cornhill</i>)	1878 (with "Lifted Veil")	
8	<i>Felix Holt</i> [長編]	1866. 06.15 (3 vols.)	1867 (2 vols.) 1870 (<i>Romantische Werken</i> , vol. 5)	1866 (First translation, summarizing abridgement, in periodical) 1868-69 (Second translation, abridged, in periodical)
9	<i>The Spanish Gypsy</i> [物語詩]	1868.05.25		
10	<i>Middlemarch</i> [長編]	1871.12.01[一説には11月]-1872.12.01	1872-73 (4 vols.)	1890 (First translation, 2 vols.)
11	<i>The Legend of Jubal and Other Poems</i> [詩集]	1874.05.	1888 "The Legend of Jubal"	
12	<i>Daniel Deronda</i> [長編]	1876.02.01-1876.09.01	1876 (4 vols.)	1881 (2 vols.; 1882, second printing; 1886, third printing)
13	<i>Impressions of Theophrastus Such</i> [随筆集]	1879.05.28	1879 (1 vol.)	

(Van Werver 160-61, 166-71; Holmstrom 77-78; Bakerの書誌より作成)

たびたび取り上げられていた。⁵ それゆえ、当時のオランダでは、ゴッホが思っていた以上に、エリオットの作品は知的な読者にはそれなりに知られていたと言えるのであり、ゴッホがその後、エリオットの他の作品を知るようになる可能性がなかったとは言いきれないようである。また、ゴッホは1888年3月にパリに到着し、以後フランスで暮らすことになるが、そのフランスでもエリオットの作品は、オランダと同様、かなり翻訳されていた。フランスにおいても、ゴッホが『フロス河の水車場』や『ダニエル・デロンダ』等の作品を知る可能性が全くなかったとはやはり言えないのである。(表2を参照)

翻訳されていたのは、個々の作品だけではない。1872年に英国でAlexander Mainの*Wise, Witty, and Tender Sayings in Prose and Verse Selected from the Works of George Eliot* (エリオットの作品の引用句集)が発行されているが、同じ1872年に同著に基づく引用句集のオランダ語訳が発行されている。フランスでもエリオットの作品の抜粋集の仏訳が1874年、1877年、1879年に出版されている (Baker 463, 479-80)。オランダやフランスに

おいて、エリオットの作品類はこれらの抜粋集を通じても紹介されていたと言えるのである。

以上のような状況を考えれば、ゴッホがその生涯のなかで読んだエリオットの作品を上記の6作品であると断定することには幾分慎重であらねばならないと言えよう。

3 ゴッホと英米文学

他の英国作家とゴッホの関係を見ておこう。ゴッホが読んだ英文学を作家別・ジャンル別・作品名別に見ると、表3のように整理できる。⁶ また、ゴッホの年譜との関係からみれば、ディケンズの作品を除けば、彼と英文学との関わりはロンドン支店時代から始まったと言えるようである。先述したように、ゴッホがエリオットを読み始めたのもロンドン支店時代である。ゴッホにとって、エリオットの作品は本格的に英文学に親しむようになった初期の頃からの愛読書であったと言えよう。

ロンドン支店勤務となり、初めて訪れたロンドンで、ゴッホは「オランダではあまりよく知られていない詩人」(L11a)であったキーツ (1795-1821) を「大いに楽しんで

表3 ファン・ゴッホと英文学

劇作家	書簡で言及されている作品等
1 シェイクスピア (1564-1616)	『リア王』(L133, LW13)、『ジャック・マナラシ』(L152)、『お気に召すまま』(L156)、『マクベス』(L326, L342, L343)、『リチャード二世』(L597, L W13)、『ヘンリー四世』(L133, L597, LW13)、『ヘンリー五世』(L597, LW13)、『ヘンリー六世』(LW13)、『尺には尺を』(L599)、『ヘンリー八世』(L599)等；ミレーの『オフィーリア』(L10)、『ユゴーのシェイクスピア論』(L136)、『メンツェルの『シェイクスピア』』(LR13, LR15)、『L136, L595, LR13, LR15, LT11』；なお、父親がテオに宛てた手紙 (1875年2月1日付け: Van Gogh Letters. 2 April 2005 (http://webexhibits.org/vangogh/letter/3/etc-1875.htm))によれば、ゴッホは1875年に『ハムレット』を観劇している。
詩人	
1 トマス・キャンベル (1777-1844)	『ロッキールの警告』(L339b)
2 トマス・ムア (1779-1852)	『かの日々のこと』(L253；オランダの伝道詩人Eliza Laurillardの意識によって引用、原題は"The Light of Other Days")、『かの乙女は誰？ 聖ヒエロニムスの恋』(L623, LW18)
3 キーツ (1795-1821)	『聖アグネス祭の前夜』、『聖マルコ祭の前夜』、『秋』(L10a)等
4 トマス・フッド (1799-1845)	『シャツの歌』(L185, LR2)
5 テニスン (1809-92)	『イン・メモリアム』(L122)
6 クリステイーナ・ロゼッティ (1830-94)	『上り坂』(L41, L74, L112, 「フィンセントの説教原稿」p.163)
物語作家、小説家	
1 パニヤン (1628-88)	『天路歷程』(L82, L109, L112, L122a)；ボートンの『天路歷程』(L74, L82)、『L133, L518]
2 ディフォー (?1660-1731)	『ロビンソン・クルーソー』(L121, L220, LR13)
3 ダグラス・ジェロルド (1803-57)	『コードル夫人の寝室説法』(LR15；専らCh. ケーンの素描に言及)、『ある羽根の物語』(LR15；専らデュ・モーリエの挿絵に言及)
4 ブルワーニッソン (1803-73)	『ケネルム・チリングリー』(L56)
5 サッカレー (1811-63)	[LR1]
6 ディケンズ (1812-70)	『ドンビー父子』(L110)、『ピクウィック・ペーパーズ』(L84)、『二都物語』(L111, L133, L136 [英語版]、LR36)、『子供のための英国史』(L114)、『ハード・タイムズ』(L131, LR30)、『エドウィン・ドルード』(L207, L252)、『リトル・ドリット』(L251, L263, LR35)、『クリスマス・キャロル』(L582, L583, LR30, LW11)、『オリヴァー・トゥイスト』(LR15)、『マーティン・チャズルウィット』(LR17)、『悪かれた男』(LR21, LR30)等。ディケンズの伝記全集 (LR30)、ハウスホールド版ディケンズ(L112, L205, L229, L252, LR15, LR30)、『イリュストラシオン』のディケンズの肖像画 (L113)、メンツェルの『ディケンズ』(L205)、『LR1』、ファイルズの『主のいない、ディケンズの椅子』(L220, L252, LR24, LR29, LR30)、バーナードの素描の写真(L259, LR30)、テヌのディケンズ論(L295, LR38)、ディケンズの息子が書いたもの(LR8)、自殺に対する処方箋 (L106, LW11)、『フィンセント・ファン・ゴッホの思い出』p.20；母親がテオに宛てた手紙[1879年8月19日付け: Van Gogh Letters. April 2005 (http://webexhibits.org/vangogh/letter/8/etc-fam-1879.htm)]；[L81, L121, L133, L136, L207, L208, L241, L262, L605, LR13, LR17, LR1, LR35, LR43, LW9, LW11]
7 カラー・ベル (シャーロット・ブロンテ、1816-55)	『シャーリー』(L1481, L160)、『ジェイン・エア』(L1481, L160)、『LR8]
8 ジョージ・エリオット (1819-1880)	表1を見よ。
9 ダイナ・マリア・マロック (1826-87)	『ジョン・ハリファクス』(L73, L102, L110)、『人生のための人生』(L73)
思想家、伝記作家、説教家、その他	
1 カーライル (1795-1881)	『フランス革命』(L111, L112, L181)、『オリヴァー・クロムウェル』(L181, L338)、『過去と現在』(L248, L253)、『衣装哲学』(L295, LR30)、『英雄と英雄崇拜』(L332)；ルグロの書齋のカーライルのエッチング(L297)、『グラフィック』のカーライルの肖像画(LR30)、『L113, L160, L336, L451, L524, LR38, L583]
2 ジョン・フォースター (1812-76)	『チャールズ・ディケンズ伝』(L241, LR17)
3 ブランチャード・ジェロルド (1826-84)	『ロンドン巡礼』(L108, L140, L204, L626)；専らドレの絵に言及)
4 スパージョン師 (1834-92)	『小さな宝石』(LA7；LA7はフレデリック・ファン・エーデンにあてたヘルリッツ氏の書簡)、『L94a；L94aは新聞に掲載されたブリュッセ氏の文章]

([]内の書簡は、作家名だけが言及されているものを示している；『ゴッホ書簡全集』等より作成)

で」(L11a) いる。このロンドン滞在中、キーツが「この画家たちみんなに愛読されて」(L11a) いることを知ったことが、このロマン派詩人を読み始めるきっかけであった。続くパリ支店時代、ゴッホは、ブルワー＝リットン(1803-73)の『ケネルム・チリングリー』を読み、「ほんとに立派な」(L55) ものだと感心している。この小説は、その当時、伯母が読むようにと贈ってくれた本であった。福音伝道時代になると、ゴッホはトマス・ケンプス(c.1380-1471)とバニヤン(1628-88)の『天路歷程』に傾倒している(L82, L112, L122a)。聖書とスパージョン師(1834-92)の本に親しみ(L42, L94a, LA7)、書簡のなかでクリスティーナ・ロセッティ(1830-94)の信仰詩「上り坂」の一節が多少不正確な原文で繰り返し(計3回)引用されたり、「非常に美しい」イギリスの讃美歌が紹介されたりするようになるのも、パリ支店時代から福音伝道の時代にかけてである(L41, L74, L112, L41)。画家となったエッテン時代、伯父のフィンセントの家で偶然出会ったのがカラー・ベル(シャーロット・ブロンテ [1816-55])の『シャーリー』であった。ゴッホはこの「大へん分厚い本」を3日間で読み上げ、感銘を受けている(L148)。

全体的にみて、ゴッホが専ら愛読した英国作家は、シェイクスピア(1564-1616)、カーライル(1795-1881)、ディケンズ(1812-70)、エリオットの4人に絞られる。他の英国作家はせいぜい数通の書簡において言及がなされているだけであり、その言及作品もたいていは1ないし2作品に限られ、その言及時期も画家時代以前か以後の、どちらかの時代に限定されている。⁷しかし、上述の4作家は言及作品も多岐にわたり、しかも両時代にまたがって比較的頻繁に言及がなされ、なかにはかなり長いコメントも見出されるのである。

シェイクスピアを、ゴッホは福音伝道時代の末期、次第に深まりゆく宗教的「懐疑」(書簡全集1巻p.20)のなか、1879年の冬の間に、ディケンズやストウ夫人の作品とともに読みふけり、また晩年のサン・レミ時代にも読んで、感銘を新たにしている(L133, L597, L599)。「神秘的」で「美しい」シェイクスピアの作品に、ゴッ

ホは「レンブラント的な」、「熱と感動にふるえる絵筆に比すべき」ものを認め、その作品に横溢する「現実に生きて」存在する実在感や「実に烈しい生き生きした」現実感を称えている(L133, L597, LR13)。

書簡を見る限りでは、ゴッホが強い関心を寄せたヴィクトリア朝の3作家(カーライル、ディケンズ、エリオット)のうち、カーライルを読み始めた時期が一番遅かったらしく、神学大学の試験勉強にいそしんだアムステルダム時代から、カーライルへの言及が見出される。エッテン時代の1881年11月、ゴッホは「現代文明の先端に立っていると考えられる男女たち」(L160)の例として、仏作家のミシュレ、米国作家のストウ夫人(1811-96)と並んで、カーライルとエリオットを挙げている(L160)。ゴッホはカーライルの説く仕事の福音(L253)や「悲しみの讃仰」(L295)に共感し、彼のなかに「人間性に対する愛を——深い愛を」見出している(LR30)。

ディケンズへの最初の言及が見られるのはイングランド時代の1876年11月17日の書簡においてである。その書簡のなかでディケンズの小説でお馴染みの場所としてホワイトチャペルの名前が挙げられていることから判断して、『ピクウィック・ペーパーズ』と『オリヴァー・ツイスト』のいずれか、ないしはその両作品を、ゴッホはイングランド時代以前にすでに読んでいたらしい(L81)。ハーグ時代の書簡によれば、「ぼくは、ディケンズのものはどれも感心しているが、この二冊の「子供のためのお話」『クリスマス・キャロル』と『憑かれた男』は、子供の頃からほとんど毎年読み返している。読み返すたびに始めて読むような気がするんだ」(LR30)とあり、ディケンズの『クリスマス・ブックス』はゴッホの子供の頃からの愛読書であったことが知られる。

晩年のアルル時代、ゴッホが「非常に注意深く」読み返した本は、ストウ夫人の『アンクル・トムの小屋』とディケンズの『クリスマス・キャロル』であった。そうしたディケンズへの強い愛着は、『アルルの女』(L'Arlesienne, 1890)のなかに『アンクル・トムの小屋』とともに、ディケンズの『クリスマス・ブックス』が描き込まれていることによっても窺えよう。ディケンズの

表4 ファン・ゴッホと米文学

作家	書簡において言及されている作品等
1 アーヴィング (1783-1859)	コールドコットの挿絵(『スケッチ・ブック』、「クリスマス・ブック」、「プレイスブリッジ・ホール」)(L267, LR21)
2 ボウ (1809-49)	『怪奇物語』、「大鴉」等(L299)、[L518]
3 ロングフェロー (1807-82)	『マイルズ・スタンディッシュの求婚』、『エヴァンジェリン』(L11a, L51)、「シシリーのロバート王」(『街道筋の旅館の物語』中の物語); L51, L74)、『街道筋の旅館の物語』(L57)、「星の光」(L75n1[?], L86n1)、「一日が終わり」(L75)、「わが失われた青春」(L105, L181n1)、「雨の日」(L328)等; ロングフェローの『ヒューベリオン』に関しては、「ぼくはまだ『ヒューベリオン』を読んでいない。しかし、非常に美しいという話だ」(L55)という記載が見いだされるが、その後、ゴッホが実際に読んだかどうかはわからない。[L56, L281]
4 ストウ夫人 (1811-96)	『妻と私』(L160)、『我らと我らの隣人たち』(L160)、『アンクル・トムの小屋』(L130, L248, L582, W11)、[フィンセント・ファン・ゴッホの思い出] p.20, L133, L161, L605]
5 J. L. モトリ (1814-77)	『オランダ共和国の勃興』(L112, LW4)
6 スーザン・ウォーナー (1819-85)	『広い、広い世界』(L64, L68, L75, L88, L100)
7 ホイットマン (1819-92)	『コロブスの祈り』(『草の葉』中の一編; LW8)

([] 内の書簡は、作家名だけが言及されているものを示している; 『ゴッホ書簡全集』等より作成)

仏訳全集をほとんど揃えており、ハウスホールド版を少しづつ購入しようと考えてさえいたゴッホは、ディケンズの全作品を読破したと考えられている (LR30; Treuherz 119)。

また、ゴッホはディケンズの作品だけでなく、その作品のイラスト等にも多大な関心を示し、特にバーナードやファイルズ、マホネイの筆になるものを「すばらしい」もの、「非常に美しい」ものとして褒めている (L205, L229, L259, LR15, LR30)。ゴッホは「イングランドのもの」というと、ぼくのきれいなものがしょっちゅう出て来るが、白黒とディケンズで、それら全部の埋め合わせがつくよ (L262) と述べているが、お気に入りのイラストの付いたディケンズの作品 (例えば、ハウスホールド版) は、文字通り「白黒とディケンズ」の両方を同時に満たすものとして、ゴッホを喜ばせていたに違いない。英国作家のなかでは群を抜いて書簡中での言及が多いディケンズは、ゴッホが愛した英国作家の筆頭をかざる人物である。

最後に、すでに本稿において何度か言及したストウ夫人を含む、米文学とゴッホの関係を一瞥しておこう。ゴッホが愛読した米国の作家は、ポウ (1809-49)、ロングフェロー (1807-82)、ストウ夫人、スーザン・ウォーナー (1819-85)、ホイットマン (1819-92) の5名である (表4参照)。このうち、ゴッホが特に好んだのはロングフェローとストウ夫人であった。

ロングフェローは、主にロンドン支店時代から福音伝道時代そしてハーグ時代に愛読されていたようである。特に「星の光」(『夜の詩集』[1839]所収)は、ゴッホが時折愛読していた詩として知られている (L86)。言及書簡数からいえば、ロングフェローが一番多く、ストウ夫人は次席を占めることになるが、ゴッホによる賛美・評価の内容を考慮すると、一番愛読したと言えるのはストウ夫人である。すでに触れたように、ストウ夫人は「現代文明の先端に立っていると考えられる男女たち」の一人に数えられるとともに、福音書を「現代に、我々の生活に、いかに適用したらいいかを教えている」作家として称賛されている (L161)。1879年の冬にポリナージュで本格的にストウ夫人の著作を読んで以来、ゴッホのストウ夫人への愛着は晩年まで続いている (L133, L160, L582, LW11)。ディケンズに関連して指摘しておいたように、『アルルの女』のなかに描き込まれている本の一つがストウ夫人のものであった。

ゴッホが晩年に愛読したことが知られている米国の詩人ホイットマンは、ゴッホの作品への影響という点で注目し、もう一人の作家である。ゴッホはホイットマンを「率直で純粋な」詩人として称え、特に「コロンプスの祈り」(『草の葉』[1855-92]所収)に感銘を受けている (LW8)。ホイットマンの影響を受けたとされる

のは、ゴッホの作品中、最も有名なものの一つ、『星月夜』(*The Starry Night*, 1889)である。その作品のタイトル、その作品の主題(天と地の調和した結合)や星のイメージ等という観点から、ホイットマンの5編の詩——「真昼から星月夜へ」、「コロンプスの祈り」、「先頃ライラックが前庭に咲いたとき」、および「私自身の歌」——がゴッホの作品の着想源として諸家たちによって指摘されている ("From 'Bare-Bosom'd Night' to *Starry Night*").

ゴッホが描いたのは、愛読していたホイットマンの特定の詩のイラストではない。ホイットマンの影響は、直接的な題材的源といった表面的なレベルではなく、「調和した結合」というヴィジョンや星のイメージのレベルにおいて感知されるものであり、エリオットの場合と同様、その影響はより精妙な種類のものであったと言える。(エリオットに関しては、「ゴッホとエリオット」のなかの「3 文学的インスピレーションとしてのエリオット」を参照。)

4 ゴッホの文学観

「英国における最初の唯美主義芸術の原点」と言われ、スウィンバーン (1837-1909) が「色彩のメロディー、形態のシンフォニーは完璧の一語に尽きる。また一つ美しいものが実現された……その意味は美そのもの、存在理由は存在することそれ自体だ」と絶賛した、アルバート・ムーア (1841-93) の『アザレア』が発表されたのは、1866年である (高橋 123-24; *Victorian High Renaissance* 143)。英国に唯美主義の芸術観を導入する役割を果たしたと評価される、ペイター (1839-94) の芸術論集『ルネッサンス研究』は、1873年に発表されている (『英米文学辞典』1110)。これらムーアやペイターを先駆として、英国で唯美主義的な風潮が隆盛をみるのは、1890年代を待たねばならない。ゴッホは1890年に没しているのに、唯美主義の流行を見る前に亡くなっていることになるが、少なくとも、彼が本格的に英文学に親しむようになった時期は、英国に唯美主義の芸術観が導入された時期と重なっている。とはいえ、ゴッホはスウィンバーンもペイターも読んではいない。むしろ、ゴッホの文学に対する姿勢の根底には、多かれ少なかれ、人生のための芸術という芸術観が横たわっていたと言えるようである。文学すなわち本を真剣に研究し、本から学ぶという真摯な態度が一貫して見受けられるのである。

ゴッホは、ポリナージュ時代に、「人はものの見方や生き方を学ばねばならぬように、本の読み方も学ぶ必要がある」(L133)と主張し、エッテン時代には、「ぼくが本を読むのは……それらの著者がぼくよりはもっと広い見方で、もっと大きな寛容さをもって、またより強い愛をもって物を見ているからだ。彼らがぼくより現実

をよく知っているからだ。ぼくはただ彼らから物を学びたいだけだ」(L164)とさえ、断言している。晩年のアルル時代にストウ夫人やディケンズを注意深く読み返したのも、「かちっとした思想を入れたい」(L582)という真摯な動機がその根底にあったからであり、その際、特に『クリスマス・キャロル』を再読したのは、ゴッホがその作品のなかには「何度もくりかえし読まねばならないほど深刻なものがある」(L583)ことを認めていたからであった。

このようなゴッホの芸術観が色濃く表れているのが、ゴッホの画家時代の前期を形作るオランダ時代における社会派リアリズムへの強い共感と傾倒である。英国のミレイやハーコマー、フランク・ホルのような現代の大家たちにゴッホが見出した「特別な魅力」は、「おそらく現代の大家たちのほうが、[昔の大家たちよりも]より深い思想家である」というものであった(L218)。また、「社会を敵意をもって眺めているように見える」ガヴァルニヤドーミエと比較して、⁸ゴッホが『グラフィック』の草分けの人たちにより高い価値を認めたのも、後者の人たちが同様に「真実の主題」を選びながらも、「何かしら高貴で、しかももっとシリアスな感情」、すなわち、「人間同士としての温かい心」をより湛えているからであった(L240)。

アムステルダム時代には「内面的な、精神的な人間」になることを目指し(L121)、ハーグ時代には「物質崇拜」の趨勢に抗して、「ぼくはもっと簡潔で、もっと素朴で、もっとまじめなものが欲しい。もっと魂が、もっと愛が、そしてもっと心が欲しい」(L252)と希求しているゴッホは、英国の作家のなかでは、とりわけシェイクスピアやカーライル、ディケンズ、そしてエリオットのなかに、この高貴でシリアスな感情を認めて共感していたと言える。ゴッホによれば、彼らは皆「魂によって仕事をしているような芸術家たち」(LR43)に他ならなかった。

結局のところ、自らが生きていた時代を批判して、「いまの熱病じみた、あわただしい現代生活のなかにあっては、ぼくらはあまりにも一面的になってしまう」(L160)と述懐しているゴッホは、この狭隘なる一面性を乗り越え、真の芸術家がつ、広い「ものの見方」を学ぶ有効な手段として、文学に目を向け、読書していたと言えよう。ゴッホ自身が告白しているように、彼が本を読むのは「その本を書いた芸術家をとらえるため」(LW14)だったのである。その意味では、ゴッホの文学に対する愛好は、その底に極めて真摯な目的を秘めたものだったのである。

5 ゴッホの絵画

(1) 『グレート・レディ』(The Great Lady, 1882)

英米文学に親しんでいたゴッホであるが、英米文学の

テキストそのものを直接の題材として作品を制作することは行っていない。ホイットマンとの関連で簡単に触れておいたように、エリオットがゴッホの作品に与えた影響にしても、特定の絵の直接的な題材的源といった表面的レベルのものではなく、作品のなかに感取される人間的情感や全体的な主題の選択、作品の中心的意図という深いレベルにおいて認められるのであり、より精妙な種類のものであった(詳しくは「ゴッホとエリオット」を参照)。

しかしながら、ただ一度だけ、ハーグ時代にトマス・フッドの詩に基づき、それを試みている。「昼間、衣装を一着買おうと外出した際、貧しい針子を目にしたために……自分の富のことで良心に責められ」、寝つけずにいる、「ある金持ちの婦人」(L185)をスケッチした作品『グレート・レディ』がそれである。当時同棲していたシーンをモデルにして描かれた、ハーグ時代の「傑作」の一つである(ボフナー 60-61)。

ただし、ゴッホの描いたトマス・フッドの詩とは、針子の過酷な境遇をうたった「シャツの歌」(1843)であると指摘されている(Seznec 287)が、「シャツの歌」にはゴッホの述べているような「金持ちの婦人」は登場しない。ゴッホの記憶違いであろう。「トマス・フッドの詩に、ある金持ちの婦人のことを語っているのがあると思う」(L185)というゴッホの文面から判断すると、ゴッホは以前に読んだトマス・フッドの詩を思い出しながら、この作品を描いたらしい。おそらく、この「金持ちの婦人」は、「シャツの歌」を読んでゴッホが新たに想像した女性ではないだろうか。ゴッホの記憶のなかで、その点があいまいになり、実際の詩の内容との混同が生じたのだと推察される。

(2) 「織工」のシリーズ

「ゴッホとエリオット」において、エリオットと関連づけられるゴッホの具体的な作品として、『スープ配給所』、「織工」のシリーズ、『ゴッホの寝室』を指摘し、若干の考察を試みた。その考察を補足するものとして、それらの作品の一覧表(書簡中に描かれているスケッチも含む)を表5、表6、表7に掲げるとともに、「織工」のシリーズに関連する、社会史的・文芸史的背景を記してしておきたい。

「織工」のシリーズは、画家ミレー(1814-75)の「精神的な息子」(チェルシュ50)となったゴッホがブラバントのヌエネン村で意欲的に取り組んだ作品である。この時期、すなわち、ゴッホが画家となり、「織工」の絵を制作した1880年代は、美術史的に見れば、まさにミレーの評価が変化した時期にあっている。

ミレーが農民画家として登場してくるのは1850年代から(より具体的に言えば、ミレーがバルビゾンに移った

1849年から)であるが、ミレーによって描かれた農夫の労働の絵は、当初は挑発的なものと見なされていた (Pollock 184; 『ミレー展』 152; Zemel 128)。しかしながら、ミレーの死後間もない1880年代には、それらの絵のもつ「社会批判の要素は効果的に無視され」、ミレーの農夫の労働の絵は「聖書的な尊厳と人間の宿命の画像」として歓呼して迎えられるようになる (Zemel 128)。

この変化に決定的な役割をはたしたのが、1881年にパリで出版されたアルフレッド・サンシエの『ジャン＝フランソワ・ミレーの生涯と作品』である。⁹ ミレーの親友によって書かれたこの伝記は、「農夫の労苦と不朽の尊厳を称揚した作品を描いた、聖人のような人物」というミレー観を促進させ、「[道徳・宗教・清貧・農民]をモットーとするミレー像」(いわゆる「ミレー神話」)を作りだし、フランス国内のミレー評価を不動のものとした、と言われている (Zemel 128n26; 井出328-29, 331)。

ゴッホは、ハーグ時代の1882年3月、夜にランプをともしてこの本を読みふけり、「たいした男」としてミレーを賛嘆している (L180)。「芸術家もまた、社会的使命を持っている」ことを認識し、キリスト自身ではなく、「キリストの教え」を描いた画家として、ミレーはゴッホが最も尊敬し、最も重要だと見なした現代画家の一人であった (Seznec 287, 286; Zemel 128)。理想の農民画家としてミレーを称えているゴッホは、サンシエの打ち出したミレー像を素直に受け入れ、「ミレー神話」によって奮い立たされていたと言えよう (井出8, 329)。その意味では、ゴッホのミレー観はまさに時流に棹さすものであったことになる。しかし、そもそもゴッホにその伝記を読み耽らせ、そのミレー像にいたく感動させたのは、絵画と同等に文学 (この場合には伝記であるが) を重んじ、芸術に高貴でシリアスな感情を求める、ゴッホ自身の芸術観ないし芸術的態度だったと言えよう。この芸術的態度ゆえに、ゴッホはサンシエの本を手にして読みふけり、サンシエが描き出した「聖人のような人物」に彼自身が芸術に求めていた高貴でシリアスな感情の表現の理想的体現者を見出し、この上ない共感を覚えたのではないだろうか。ゴッホのミレー観は、たんに時代の子とみなせるだけでなく、彼の芸術観ないし芸術的態度のあらわれとしても捉えることができるものだろう。

「織工」のシリーズに関連して、もう一つ興味深い点がある。それは、Zemelが指摘している、ゴッホの描く織工のイメージの変化に関するものである。そもそも織工のシリーズは、産業化を嫌い、サンシエの打ち出した農民画家としてのミレーに傾倒したゴッホが、「素朴で、より「文明化されて」いない世界の一部」をなす「ブラバントの労働者や職人たちへの敬意」として着手したものである。それは当初、「田舎の生活と職人階層

に対する、彼自身の理想主義的態度」を反映した、「理想化された過去へのノスタルジア」を伴うものであった (Zemel 128, 123, 125)。ゴッホがわざわざ、1730年という刻印のある、「彼が見つめることのできた最も古い織機」(表5の作品番号JH449, JH452を参照)を描き、さらには、当時使用されていた、より近代的な照明(「一種の吊りランプ」)の代わりに「時代遅れのランプ」(表5の作品番号JH455を参照)を描き込んでいる点に、そうしたゴッホのノスタルジアが偲ばれる (L355, L367; Zemel 128, 132; Treuherz 123)。しかし、ブラバントの織工たちの置かれている現実の苛酷な境遇への認識の深まりとともに、¹⁰ ゴッホの絵には不穏なものが入り込み、描かれる織工は最終的には「不格好な、亡霊のような人物」になっていく (Zemel 132)。

ゴッホと同時代人のリーバーマン (1847-1935; 『織工の工場』 [1882]) やラッパルトにとって、¹¹ 手織工は「崇敬の念を起こさせるノスタルジア、および古風な田舎の魅力の主題」であったのに対し、彼らから10年後のケイト・コルヴィッツ (1867-1945; 連作版画『織工の反乱』 [1893-97]) にとって「手織工はプロレタリアートの怒りと政治的反抗のシンボル」であった。しかし、「不格好な、亡霊のような人物」としてのゴッホの織工は、同時代のものや後代のもの、そのいずれにも属さず、崇敬の念を起こさせるものでもなければ、怒りや同情を喚起するものでもない、より複雑で人の心を不穏にかき乱すものとなっているのである (Zemel 136-37)。¹²

エリオットの作品に描かれている織工も理想化されてはいないが、ゴッホの描く織工とは異なっている。「エイモス・バートン師の不幸」では、「道路は石炭の粉で黒く、煉瓦造りの家々は煙で煤けている」地域で、一軒おきに田舎家の窓辺に据えられた織機にむかい、作業をしているのが見られる、「狭い胸」をした、「青白く、病弱そうな」手織工の姿が、スケッチされている (Eliot, *Scenes* 59-60)。「ジャネットの悔悟」でも、「長い列をなす窓の奥でリボン織機が騒々しい音をたてている新しい赤煉瓦の家並と半ば藁葺き半ば瓦葺きの古びた田舎家とが交互に立ちならんでいる——埃と惨めさの上に長い影を落としてその醜さをやわらげてくれるものと何もない、陰気な広い通りの一つ」に、ぶらりと姿を現した、「様々な色の絹の切れ端でつぎはぎされた、着古しの黒服を着こんだ3人の狭い胸をしたリボン織工」が、点描されている (Eliot, *Scenes* 279-80)。『急進主義者フィリクス・ホルト』の旅行者が目にするのは、「手織り機のカタカタという音」が響く、非国教徒の「大小の村」(6)である。それらの村の手織工たちの顔は「男も女も、夜なべ仕事でやつれ……青白く、厳しい。……至るところ、田舎家と幼い子どもたちは汚れている。母親が織機に体力を消耗し、疲れ切ってしまうからである」(6)。

エリオットが描いているのは19世紀前半のイングランドであり、ゴッホが描いたのは19世紀後半のブラバントという相違があるけれども、エリオットが素描している、これらの手織工は、いずれも、ヌエネン村と同様の、いわゆる産業村に住む織工たちである。エドワード・P・トムスンが指摘している、「職人の地位からうちひしがれた下請け労働者の地位」(321)に落ち込んでいっている織工たちと言ってよいであろう。一方、『サイラス・マーナー』に出てくる織工は、町から田舎へ移住して来て、農村にちりぢりに暮らす、いまだ「職人の地位」を保っている、孤独な手織工である。しかし、その身体的特徴は産業村の織工と同様の、「青ざめた、矮小な男たち」というもので、「筋骨たくましい村人たちの傍らでは、滅びゆく種族の生き残りのように見えた」と述べられている(51-52)。

エリオットの作品には、たしかに古き、良き、素朴な田舎の共同体へのノスタルジアが認められる面もある。『アダム・ビード』における「麗しの昔の余暇」(558)への懐古的言及や、大きな工場町となって消滅してゆくランタン・ヤードと対比される、自然の豊かなラヴィロウ村の旧式な生活等は、その代表的な例と言える。しかしながら、エリオットの素描した、農村に孤独に暮らす、血色の悪い、矮小な手織工や産業村のやつれ果てて青白い顔をした、病弱な織工たちは、そうしたノスタルジアと結ばれた崇敬の念を起こさせる職人たちでもなければ、不穏な特質をもつものと言うものでもなく、むしろ、その素描が示唆する境遇に対する同情や哀れみを喚起する要素が強いと言えるようである。¹³

ゴッホとエリオットにおける職工のイメージの、この相違の一因として、両者の田舎世界との関わり方の違いが挙げられよう。ゴッホが外部からヌエネン村へやってきて、田舎世界に対する理想主義とブラバントの現状に対する認識の対立を経験したのに対し、エリオットは土地差配人の娘として、ゴッホ以上に田舎をよく知っており、彼女の描く産業村や農村の職工は彼女の生まれ育った世界の一部をなしていた。それゆえ、エリオットにおいてはゴッホが経験したような観念と現実の矛盾・対立はより少なく、職工の境遇をよりリアリスティックに直視

できていたと言えよう。理想主義と現実のギャップが不穏なものを生み出したとすれば、リアリズムが同情や哀れみを生じさせている、と言えるのではないだろうか。

最後に、先述のホルヴィッツの連作版画『織工の反乱』に関連して、ドイツ文学が「織工」のシリーズに与えた影響の可能性について、若干の検討を加えておきたい。ホルヴィッツの連作版画は、1893年ベルリンの「自由劇場」で上演されたハウプトマンの戯曲『織工』(1892)を見たことがきっかけとなって制作された作品である。このハウプトマンの代表作は1844年6月にシュレーゼン地方で実際に起こった織工の暴動を着想源の一つとするもので、発表当時の反響は非常に大きく、政府は治安維持のため、上演を一時禁止した程であったと言われている(ノックリン 152; 若桑 58-59)。非常に有名な作品であるが、1892年の刊行である。間もないとはいえ、ゴッホの没後に発表された作品であり、ゴッホへの影響は認めがたい。ただし、同じシュレーゼンの暴動を扱った作品に、ハイネ(1797-1856)の時事詩「貧しき織工」(『フォアベルツ』誌第55号[1844年7月10日]; のちに、有名な「シュレーゼンの織工」に改稿し、1847年の『アルバム』に収録)がある。パリにいたマルクスの影響を受けているとされる作品で、エンゲルスによって英訳され、ロンドンの新聞『ニュー・モラル・ワールド』紙[1844年12月13日]にも発表されている(井上[1992] 37-43, 50-51; 大久保36-37)。ゴッホはハイネの詩を愛読しているが、書簡中にはこの時事詩への言及は見当たらない(L24, L49, L611)。どうやらゴッホはこの時事詩を読んではいないようである。この他に、シュレーゼンの織工を扱った文学作品としては、フライリヒラートの叙情詩「シュレーゼンの山間より」(1844年3月; 井上43-47)が知られているが、書簡を見る限りでは、ゴッホはフライリヒラートの詩も読んではいないようである

結局、ゴッホにおける織工の主題の文学的インスピレーションとしては、目下のところ、エリオットとミシュレ(1798-1874)の作品だけが考えられるようである(「ゴッホとエリオット」のなかの「3 文学的インスピレーションとしてのエリオット」を参照)。

表5 『スープ配給所』

	年月日	タイトル	水彩・油彩等	大きさ(cm)	作品番号(JH)	備考
1	1883年3月3日頃	The Public Soup Kitchen			328	Sketch in L271
2	1883年3月4日頃	The Public Soup Kitchen	Black mountain chalk	57× 44.5	330	
3	1883年3月4日頃	The Public Soup Kitchen	Pencil, black mountain chalk, watercolor	34× 49	331	
4	1883年3月4日頃	The Public Soup Kitchen			332	Sketch in L272
5	1883年3月6日頃	The Public Soup Kitchen	Pen	10× 10	333	

(Hulsker 80-81より作成)

表6 「織工」のシリーズ

	年月日	タイトル	水彩・油彩等	大きさ(cm)	作品番号 (JH)	備考
1	1883年12月	Interior with a Weaver Facing Right	Pencil, blackchalk pen, watercolor	24.5× 29.5	437	
2	1883年12月	Interior with a Weaver Facing Right	Pencil, blackchalk pen, brush, heightened with white	24.5× 33.5	439	
3	1884年1月前半	Weaver Facing Left			442	Sketch in Letter 351a
4	1884年1月24日頃	Weaver Facing Left	Pen	12.5× 19.5	443	Sketch probably sent with Letter 355
5	1884年1月2日頃	Weaver Facing Left	Pencil, watercolor	35× 45	444	
6	1884年1月2日頃	Weaver Facing Left	Watercolor	33× 44	445	
7	1884年1月24日頃	Weaver Facing Right	Pencil, watercolor	33× 44	448	
8	1884年1月24日頃	Weaver Facing Right, Interior with One Window and High Chair	Watercolor	30.5× 43	449	
9	1884年1月24日頃	Weaver Facing Right, Half-Figure	Oil on canvas	48× 46	450	
10	1884年2月18日-23日頃	Weaver Facing Right	Watercolor	32× 47	451	
11	1884年1月24日頃	Weaver Facing Right, Interior with One Window and High Chair	Pencil, pen, brown ink	32× 40	452	
12	1884年2月18日-23日	Weaver Facing Right	Pencil, pen, brown ink	27× 40	453	
13	1884年2月18日-23日	Weaver Facing Right, Half-Figure	Pen, washed with bister, heightened with white	26× 21	454	
14	1884年2月18日-23日	Weaver Facing Left	Pen, heightened with white	30.5× 40.5	455	
15	1884年2月18日-23日	Weaver Facing Left	Pen, washed	9.5× 13	456	
16	1884年2月18日-23日	Weaver Facing Right	Oil on canvas on panel	37× 45	457	
17	1884年3月	Weaver, Seen from the Front	Pencil, black and white chalk, pen	21× 35	462	
18	1884年4月頃	Weaver Facing Left, with a Spinning Wheel	Oil on canvas	61× 85	471	
19	1884年5月前半	Weaver, Arranging Threads	Oil on canvas on panel	41× 57	478	
20	1884年4月	Weaver, Seen from the Front	Oil on canvas	70× 85	479	
21	1884年5月前半	Weaver, Arranging Threads	Oil on panel	19.5× 41	480	Location unknown
22	1884年5月前半	Weaver, Arranging Threads	Pencil, pen, heightened with white	27× 40	481	
23		Weaver, Arranging Threads			482	Included here only on the basis of an old and unsatisfactory photograph Location unknown
24	1884年4月-5月	Weaver with Other Figures in Front of Loom	Pen, washed	10× 13.5	483	
25	1884年5月末	Weaver, Standing in Front of the Loom	Oil on canvas on panel	55× 79	489	
26	1884年7月	Weaver, Facing Left	Watercolor	44× 35	499	Location unknown
27	1884年7月	Weaver near an Open Window	Oil on canvas on cardboard	68× 93	500	
28	1884年7月初め	Weaver, Interior with Three Small Windows	Oil on canvas	61× 93	501	
29	1884年7月初め	Weaver, Interior with Three Small Windows	Watercolor, pen	33.5× 45	502	
30	1884年7月初め	Weaver, Seen from the Front	Oil on canvas on panel	48× 61	503	

(Hulsker 104-17より作成;ただし、「水彩・油彩等」の項目に関しては、一部、*The Vincent van Gogh Gallery* [12 Oct. 2004. (<http://www.vangoghgallery.com/>)]を参照した。)

表7 『フィンセントの寝室』

	年月日	タイトル	水彩・油彩等	大きさ(cm)	作品番号 (JH)	備考
1	1888年10月16-17日	Vincent's Bedroom	Oil on canvas	72× 90	1608	
2	1888年10月16日	Vincent's Bedroom			1609	Sketch in L554
3	1888年10月17日	Vincent's Bedroom			1610	Sketch in LB22
4	1889年9月5日頃	Vincent's Bedroom	Oil on canvas	73× 92	1771	
5	1889年9月	Vincent's Bedroom	Oil on canvas	56.5× 74	1793	

(Hulsker 367, 370-71, 406, 409, 413より作成)

注

- 1 『ファン・ゴッホ書簡全集』B4番。本稿におけるゴッホの書簡からの引用はこの版により、記号Lの付いた()内の数字等は、同版の書簡の分類・整理番号を示す。なお、訳文は英語版を参照の上、文脈に応じて適宜変更してある。
- 2 ゴッホのフランス小説に対する愛着は、書簡中での言及だけでなく、静物画の題材としてフランスの小説が描かれていることにも如実に窺える。例えば、『石膏像のある静物』(JH1349)、『3冊の小説』(JH1226)、『パリの小説』(JH1332, JH1612)を参照(『ゴッホ展』94-99)。なお、JHの付いた番号はHulskerのカタログレゾネにおけるゴッホの作品番号を示している。
- 3 『ミドルマーチ』は、最初1871年12月(一説には11月 [Holmstrom77-78] から1872年12月にかけて8分冊(各冊の定価5シリング)で刊行され、その後、同じ12月に4巻本(定価42シリング)が刊行されている。
『グラフィック』に掲載の書評とは、同紙に4回にわたって掲載された以下の、無記名の書評のことである：(1)1871年12月16日号(第4巻第107号)の "Middlemarch" (p.591), (2)1872年2月17日号(第5巻第116号)の "Middlemarch.' Book II." (p. 154), (3)1872年4月20日号(第5巻第125号)の "Middlemarch" (p. 366), (4)1872年12月28日号(第6巻第161号)の "Middlemarch" (p. 610)。各回の書評で取り上げられている本は、(1)が第一分冊、(2)が第二分冊、(3)が第三分冊、(4)が4巻本である。(4)では、『ミドルマーチ』は「ジョージ・エリオットがこれまで生み出した作品のなかで、もっとも偉大で深遠なもの」("Middlemarch" 610)という評価がなされている。
これら3つの書評は、エリオットに関する最も完備した書誌FulmerとGeibelにも言及が見出されず、またMartinにおいても言及されていない書評である。
- 4 ゴッホが「とてもいいもの」として褒めている『フィリクス』のオランダ語訳は、1867年発行のもの(Van Druten and Bleeker出版の2巻本 *Felix Holt, de Radikaal*)あるいは1870年発行のもの(同じVan Druten and Bleeker出版による、エリオット作品の選集 *Romantische Werken* 全5巻 [1870-73] のなかの第5巻 *Felix Holt*)のいずれかであろう。訳者はいずれもMrs. Van Westheeneである(Van Wereven 160, 170; Baker 226, 245)。
- 5 Van Wervenによれば、オランダではエリオットに関する書評は1884までに36編が発表されている。その対象は、短編を除く、エリオットの全主要作品に及んでいる。なお、随筆集『セオフラスタス・サッチの印象』(1879)に関しては、書評ではなく、その引用が *Nederland* 2 (1879) : 407-22に掲載されている(162-

65)。

- 6 表3に挙げた英国作家20名が、ゴッホの知っていた英国作家の全てであるとは断言できない。ここに挙げた作家は、主に『ファン・ゴッホ書簡全集』第6巻及びその英語版の第4巻、それぞれの巻末にある「人名索引」、並びに、PabstとVan Uitertによるリストを参考にして調べたものであるが、見落としがあるかもしれない。このことは、表4の米国作家に関しても言えることである。
なお、サッカーに関しては、ファン・ラッパルトへの書簡で言及がなされている(LR1)が、その書簡の文面だけではサッカーの小説をゴッホが読んでいたかどうかは判然としない。Pickvanceは読んでいなかったであろうと判断している(20)。また、画家・詩人であるダンテ・ガブリエル・ロセッティへの言及がL614に見出されるが、ラファエル前派の画家として言及されているだけであり、詩人としての言及は見出されない。ラファエル前派を擁護した、ヴィクトリア朝英国を代表する美術評論家ラスキンに対しても言及は見当たらない。
- 7 専ら、作品のテキストではなく、作品に付けられた絵ゆえに言及がなされているダグラス・ジェロルドとブランチャード・ジェロルド、および、ゴッホが書いた書簡以外の資料のなかで言及されているスパージョン師を除けば、画家時代以前にゴッホの書簡のなかで言及がなされているのはキーツ、テニスン、ブルワー＝リットン、ダイナ・マライア・マロック、クリスティーナ・ロセッティの5名、画家時代以後に言及がなされているのはトマス・キャンベル、トマス・ムア、ディフォー、トマス・フッド、サッカー、カラー・ベル、ジョン・フォースターの7名である。パニヤンは例外的に両時代に渡って言及が見られ、言及書簡も主要な4人の英国作家に次いで多いものとなっている。
- 8 ただし、ドーミエの『酒飲みの四つの時期』(『酒を飲む人々』[1862]のことであろう)は、ゴッホが「常々……もっとも美しいもののひとつだと考えてきた」作品であり、「ド・グルーの絵と同じように、そのなかには魂がこもっている」と、ゴッホは評している(LR13)。サン・レミ時代、ゴッホはドーミエの『酒を飲む人々』(1862)を模写してもいる(L626; Hulsker 432-33, 436)。
なお、ゴッホはガヴァルニヤドーミエを決して低く評価していたわけではない。兩人とも偉大な芸術家として尊敬していた(L239, LR1; ファン・アイテルト 135-38, 144)。
- 9 サンシエの『ジャン＝フランソワ・ミレーの生涯と作品』の英訳は、アメリカで原本に先立つ1880年に刊行され、アメリカのミレー・ブームを呼ぶことにな

る。この英訳本では原本のタイトルが『ジャン＝フランソワ・ミレー、農民にして画家』に改められ、農民画家としての「ミレー神話」を強化することに大いに貢献した（井出 8, 328-29）。

- 10 Zemelによれば、ブラバントでは1881年においても蒸気で動かされる機械は、一般に、紡績などの繊維製造の一部だけに限られ、織布（weaving）は依然として工場の外で、町の小さな仕事場あるいはヌエネンのような近隣の村に住む職人たちに引き渡して行われていた。1880年代半ば、ヌエネンでは男性人口の約3分の1に当たる440人の織工が家内産業を形成していた、という。田舎の織工の多くは、1年中働いたわけではなく、織布は冬の期間、農閑期に収入を補うために行う仕事であったが、ヌエネンは何世紀にもわたって織物の中心地であり、ヌエネンの織工たちは大部分が専業の職人であった。かつては共同体の需要と地方の市場に仕えていた村の織工たちは、繊維産業が拡大していくに連れて、町の製造業者に依存するようになっていった。機械化された製造段階にペースを合わせるために、村の手織り織工は町の工場労働者よりもかなり低い賃金で、より多く製造しなければならず、また市場の乱調により失業に陥りやすかった。彼らの暮らし向きは地方の農夫や農業労働者よりもよいということはほとんどなかった、と言われている（Zemel 130-31; Pollock 189）。ゴッホが滞在した1880年代のヌエネンの織工たちの置かれていた現状はかなり厳しいものだったのである。

なお、Van der Heijdenはヌエネンの織工の大部分が専業の職人ではなかったと指摘し、この点に関しては、Zemelとは見解を異にしている（Van der Heijden 108-09, 112）。

- 11 「織工」のシリーズに従事していたヌエネン時代の1884年、ゴッホはラッパルトに宛てた書簡のなかで、ラッパルトの描いた『貧しい小さな織工』のスケッチを「事物の核心をつかんでいる」ものとして称賛している（LR43）。この他に、ゴッホが目にした、同時代の画家の機織りに関わる絵としては、マウフェの『機を織る女』がある。ゴッホは1882年オランダ素描協会の展覧会でその絵を見て、「忘れようのない」、「素敵な作品」であると感嘆している（LR11）。
- 12 ノックリンはZemelとは幾分異なる見解を示し、「織工」のシリーズを描いたゴッホやリヨンにおける織物産業の危機を描いたルヌール（『リヨンの産業危機、失業』[1884]）らは革命論者ではなく改革論者であり、彼らの描いた織工には、貧しい人々に対する人道主義的な深い同情が表現されている、と解している（147）。ノックリンの見解に立てば、ゴッホの織工は人道主義的な同情が表現されているものとして、同

情を喚起するエリオットの織工と同類のものと見なされることになるであろう。Zemelの論文はノックリンの論文より最新のものであり、ゴッホの織工のイメージに関してはより詳細な分析がなされている。本稿では、主にZemelの見解を参考にしながら、エリオットの織工のイメージとの比較を試みた。

- 13 ただし、孤独な、農村の織工サイラスは、エピーの養育を通して、「蜘蛛のように」（Eliot, *Silas* 64）ひたむきに織り続ける生活から救済・解放されてゆくことになる。しかも、彼の救済・解放は産業主義の波もいまだ届かない、辺鄙なラヴィロウ村の旧式な生活様式を抜きにしては考えられない。ラヴィロウ村であればこそ、サイラスは「職人の地位」を保持し、偏狭ではあるが素朴な村人たちとの交流を通して仕事と養育に勤しむことができたのである。その点では、「ラヴィロウの織工」（『サイラス・マーナー』の副題）であるサイラスの救済・解放は、「産業熱や清教徒的熱狂」とは無縁の、「昔ながらの田園生活」（Eliot, *Silas* 71）に対するノスタルジアと結ばれている側面をもっている。

付記

本稿脱稿後、ゴッホと文学に関する以下の資料の存在を知ったことをここに付記しておく：Fieke Pabst, ed., *Vincent van Gogh's Poetry Albums* (Zwolle: Unigeverij Waanders, 1988). この資料に関しては、目下、調査中である。

引用文献

- 井出洋一郎。「まえがき」、「あとがき」。『ミレーの生涯』。アルフレッド・サンズィエ著。井出洋一郎監訳。講談社、1998。5-8, 328-34。
- 井上正蔵。『ハイネ序説』。新装版。未来社、1992。
- 『英米文学辞典』。齋藤勇、西川正身、平井正穂編。第三版。研究社、1985。
- 大久保進。「ハインリヒ・ハイネの織工詩（1）：時事詩『貧しき織工』と『シュレーゲンの織工』についての若干の予備的説明」。『早稲田大学大学院文学研究科紀要』31（1986）：33-46。
- 大嶋浩。「フィンセント・ファン・ゴッホとジョージ・エリオット」。『上山泰教授喜寿記念論文集』。大阪教育図書、2005年11月30日刊行予定。
- 『オランダ・コレクションによるヴァン・ゴッホ展：宗教、人間、自然』。展覧会図録。国立国際美術館、1986年2月21日-3月31日。
- 『ゴッホ書簡全集』。改版全6巻。みすず書房、1984。（英語版 *Vincent van Gogh: The Complete Letters*. 27 Sept. 2004 <<http://www.vangoghgallery.com/letters/main>.

- htm> ; オランダ版 *Verzamelde Brieven van Vincent van Gogh* [Amsterdam: Wereldbibliotheek, 1954.]
- 『ゴッホ展：孤高の画家の原風景』。 展覧会図録。 東京国立近代美術館， 2005年3月23日-5月22日ほか。
- チュルシュ， ベルナル。 『ゴッホ：魂の日記』。 中山公男監修。 西村書店， 1990。
- トムスン， エドワード・P. 『イングランド労働者階級の形成』。 市川秀夫， 芳賀健一訳。 青弓社， 2003。
- ノックリン， リンダ。 『絵画の政治学』。 坂上桂子訳。 彩樹社， 1996。
- ファン・アイテルト， エフェルト。 「ファン・ゴッホが共鳴した画家たち」。 『ファン・ゴッホ神話』。 全国朝日放送， 1992。 129-150。
- ボフナー， パスカル。 『ゴッホ』。 嘉門安雄監修。 創元社， 1993。
- 『ミレー展：ボストン美術館蔵』。 展覧会図録。 東京展。 日本橋・高島屋， 1984年8月9日 - 11月11日ほか。
- 若桑みどり。 『ケーテ・コルヴィッツ』。 彩樹社， 1993。
- Baker, Willam and John C. Ross. *George Eliot: A Bibliographical History*. New Castle/ London: Oak Knoll/ British Library, 2002.
- Eliot, George. *Adam Bede*. Harmondsworth: Penguin, 1980.
- _____. *Felix Holt: The Radical*. Ed. Lynda Mugglestone. Harmondsworth: Penguin, 1995.
- _____. *Scenes of Clerical Life*. Ed. David Lodge. Harmondsworth: Penguin, 1973.
- _____. *Silas Marner: The Weaver of Raveloe*. Ed. Q. D. Leavis. Harmondsworth: Penguin, 1967.
- "From 'Bare-Bosom'd Night to *Starry Night*: Whitman's Words Painted by Vincent van Gogh." 2 April 2005 <http://www.whitmanarchive.org/archive1/classroom/student_projects/brian/pagetwo.html>
- Fulmer, Constance Marie. *George Eliot: A Reference Guide*. G. K. Hall: Boston, 1977.
- Geibel, James Wayne. *An Annotated Bibliography of British Criticism of George Eliot, 1858-1900*. Diss. Ohio State U, 1969.
- Holmstrom, John and Laurence Lerner, eds. *George Eliot and Her Readers: A Selection of Contemporary Reviews*. London: Bodley Head, 1966.
- Hulsker, Jan. *The New Complete Van Gogh: Paintings, Drawings, Sketches*. Revised and Enlarged Edition of the Catalogue Raisonne of the Works of Vincent van Gogh. Amsterdam/ Philadelphia: Meulenhff/ Benjamins, 1996.
- Martin, A. Carol. *George Eliot's Serial Fiction*. Columbus: Ohio State UP, 1994.
- "Middlemarch." *Graphic* 16 Dec. 1871: 591.
- "Middlemarch.' *Book II*." *Graphic* 17 Feb. 1872: 154.
- "Middlemarch." *Graphic* 20 April 1872: 366.
- "Middlemarch." *Graphic* 28 Dec. 1872: 610.
- Pabst, Fieke and Evert van Uitert. "A Literary Life, with a List of Books and Periodicals Read by Van Gogh." *The Rijksmuseum Vincent van Gogh*. Ed. Evert van Uitert and Michael Hoyle. Amsterdam: Meulenhoff/ Landshoff, 1987. 68-84.
- Pickvance, Ronald. *English Influences on Vincent van Gogh*. London: Arts Council of Great Britain, [1974].
- Pollock, Griselda. "Van Gogh as Painter of Peasants: Van Gogh and the Poor Slaves." *Peasants and Countrymen in Literature: A Symposium Organised by the English Department of the Roehampton Institute in February 1981*. Ed. Kathreen Parkinson and Martin Priestman. [London]: English Department of the Roehampton Institute of Higher Education, 1982.
- Seznec, Jean. "Literary Inspiration in Van Gogh." *Magazine of Art* 43 (1950): 282-88, 306-07.
- The Vincent van Gogh Gallery*. 12 Oct. 2004. <<http://www.vangoghgallery.com/>>
- Treuherz, Julian. *Hard Times: Social Realism in Victorian Art*. London: Lund Humphries, 1987.
- Van der Heijden, Cor G. W. P. "Nuenen around 1880." *Van Gogh in Brabant: Paintings and Drawings from Etten and Nuenen*. Zwolle: Waanders, 1987.
- Van Werven, Diederik L. *Dutch Readings of George Eliot 1856-1885*. N.p.: n.p., [2001].
- Victorian High Renaissance*. Exhibition Catalogue. City Art Gallery, Manchester, et. al., 1978-79.
- Zemel, Carol. "The 'Spook' in the Machine: Van Gogh's Pictures of Weavers in Brabant." *Art Bulletin* 67.1 (March 1985): 123-37.